



Title	『欽定訳聖書』にみられる動詞第二位現象について
Author(s)	加藤, 正治
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2009, 43, p. 69-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11595">https://hdl.handle.net/11094/11595</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『欽定訳聖書』にみられる動詞

## 第二位現象について

加 藤 正 治

### 0. はじめに

動詞第二位現象(verb second phenomena)はゲルマン諸語に見られる現象で、次のドイツ語の例が示すように、文の第一要素の位置に生じる構成素に関係なく、定形動詞(finite verb)が文を構成する第二要素の位置に生じるという特徴をもっている。

- (1) a. Adrian hat gerade das Radio angestellt.  
Adrian has just the radio turned on  
“Adrian has just turned on the radio.”
- b. Gerade hat Adrian das Radio angestellt.  
(a と同義)
- c. Das Radio hat Adrian gerade angestellt.  
(a と同義)

(Clahsen & Smolka 1985:139)

第一要素の位置に生じる構成素が変化しても定形動詞 hat が第二要素の位置に生じている。現代のゲルマン諸語では、ドイツ語のほかにオランダ語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語、イディッシュ語などにみられる。英語は同じくゲルマン諸語に属しているが、現代英語はこれらのゲルマン諸語のように規則的な動詞第二位現象を示すことはなく、若干の構文にその名残をとどめる程度である。古英語では現代英語に比べては

るかに多くこの現象が観察されるが、それでも完全に規則的であったとは言えないようである。そして中英語、近代英語と時代が進むにつれてこの現象は次第に衰えて行く。本稿は初期近代英語の動詞第二位現象に焦点を当て、当時の代表的な文献である『欽定訳聖書』から得られたデータをもとにしてこの現象を考察するものである。諸般の事情により新約聖書の「マタイの福音書」のみの調査になったため、今回の考察は聖書全体に、延いては初期近代英語全体に当てはまるものでは決してない。一つの可能性を示しただけと解釈していただければ幸いである。

### 1. 動詞第二位現象の二つのタイプ

前節で挙げたゲルマン諸語の示す動詞第二位現象は二つのタイプに分類される。一つは、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、ノルウェー語に代表されるタイプで、基本的に主節にのみ動詞第二位現象がみられるものである。もう一つは、アイスランド語、イディッシュ語に代表されるタイプで、主節と従属節両方に動詞第二位現象がみられるものである。この二つのタイプは定形動詞の最終的な着地点の違いによって区別される。前者のタイプは定形動詞がC位置に移動し、文の第一要素がCP指定部に移動するのでCP-V2と呼ばれる。それに対して、後者は定形動詞がI位置に移動し、第一要素がIP指定部に移動するのでIP-V2と呼ばれる(Kroch & Taylor 1997)。

#### (2) CP-V2

[<sub>CP</sub> XP<sub>j</sub> [<sub>C</sub> V<sub>i</sub>] [<sub>IP</sub> YP [<sub>I</sub> t<sub>i</sub>] [<sub>VP</sub> ... t<sub>i</sub> ... t<sub>j</sub> ...]]]

#### (3) IP-V2

[<sub>CP</sub> C [<sub>IP</sub> XP<sub>j</sub> [<sub>I</sub> V<sub>i</sub>] [<sub>VP</sub> ... t<sub>i</sub> ... t<sub>j</sub> ...]]]

従属節ではC位置に補文化子などの要素が存在するために、そこへの定形

動詞の移動は阻止される。従って CP-V2 言語では従属節において動詞第二位現象は生じない。他方 IP-V2 言語は動詞第二位を実現するのに C 位置を利用しないので従属節でも動詞第二位現象が生じる。Kroch & Taylor (1997)によれば古英語は IP-V2 言語であり、中英語は初期の段階で北部方言が CP-V2、南部方言が古英語の特徴を色濃く残して IP-V2 であったが、その後両方言の文法の競合の結果14世紀中頃までに動詞第二位現象は消失したとされている。消失後も動詞第二位構文はいわば例外的に生じるが、これらが IP-V2 のかそれとも CP-V2 のかという疑問が残る。英語は歴史的に北部から変化が始まったということを考慮に入れれば、CP-V2 ということになろう。また、Kroch & Taylor (1997)では、従来は付加語 (adjunct) としての副詞語句が文の第一要素の位置に置かれても動詞第二位現象を引き起こすことはなかったが、中英語北部方言ではそのような制限が無くなり、どのような副詞語句が文頭に来ても定形動詞が第二要素の位置に置かれた、ということも指摘されている。今回の調査によって得られた資料でもそれと同様の傾向がみられるので、やはり消失後は CP-V2 である可能性が高いと言えそうである。ただし、これは決定的な証拠を欠いているので、以下では CP-V2、IP-V2 両方の可能性を念頭において話を進める。

## 2. 『欽定訳聖書』にみられる動詞第二位現象

前節で述べたように、動詞第二位現象は14世紀中頃までに消失したとされているが、『欽定訳聖書 (the Authorized Version of the Bible)』ではその名残と考えられる倒置文が観察される。最もよくみられるのは次例のような *then* を第一要素にもつ倒置文である。

- (4) a. Then came Jesus from Galilee to Jordan unto John, to

- be baptized of him. (「マタイの福音書」3.13)
- b. Then touched he their eyes, saying, According to your faith be it unto you. (同9.29)
  - c. Then began he to upbraid the cities wherein most of his mighty works were done, because they repented not. (同11.20)
  - d. Then charged he his disciples that they should tell no *man* that he was Jesus the Christ. (同16.21)
  - e. Then were there brought to him little children, that he should put *his* hands on them, and . . . (同19.13)
  - f. Then spake Jesus to the multitude, and to his disciples, Saying, The scribes and the Pharisees sit in Moses' seat: . . . (同23.1)
  - g. Then assembled together the chief priests, and the scribes, and the elders of the people, unto the palace of the high priest, . . . (同26.3)
  - h. Then released he Barabbas unto them: and when he had scourged Jesus, he delivered *him* to be crucified. (同27.26)

古英語においては、then に相当するþa, þonne が文頭に置かれた倒置文は動詞第二位現象の代表的な構文の一つであった。同様に中英語においてもþa, then が文頭に置かれると動詞第二位現象が現れた。また、用いられている動詞は特定の動詞、あるいは特定のタイプの動詞に限定されているわけではなく、多様な動詞が用いられていることがこのわずかな例から

も分かる。そういう意味で（4）の例は古英語からの生き残りと断定できよう。同様に動詞第二位現象を示す副詞として therefore, so, likewise, there (場所), afterward, yet, hereafter がみられた。これらを用いた例はわずかしか見つからなかったので断定的なことは言えないが、then と同様に扱えるのではないかと考えられる。

- (5) a. Therefore speak I to them in parables:

(「マタイの福音書」13.13)

- b. Likewise shall also the Son of man suffer of them

(同17.12)

- c. Afterward came also the other virgins, saying, Lord,  
Lord, open to us. (同25.11)

- d. ..., Hereafter shall ye see the Son of man sitting on  
the right hand of power, and coming in the clouds of  
heaven. (同26.64)

- e. ... ; yet hath he not root in himself, but dureth for a  
while: (同13.21)

- f. So shall it be at the end of the world: ... (同13.49)

- g. ... and behold, he goeth before you into Galilee;  
there shall ye see him: (同28.7)

副詞句が第一要素になっている例も数多くみられた。動詞の補部として機能していると思われるものも若干みられたが、時間と場所(方向も含む)、特に時間を表わす付加語がかなり多かった。これは前節で述べたように、中英語北部方言の状況に酷似している。

- (6) a. In those days came John the Baptist, preaching in the

wilderness of Judea, and . . . (「マタイの福音書」3.1)

- b. From that time forth began Jesus to shew unto his disciples, how that he must go unto Jerusalem, and . . . (同16.21)
- c. At the same time came the disciples unto Jesus, saying Who is the greatest in the kingdom of heaven? (同18.1)
- d. . . and said, For this course shall a man leave father and mother, and shall cleave to his wife: (同19.5)
- e. On these two commandments hang all the law and the prophets. (同22.40)
- f. And in them is fulfilled the prophecy of Esaias, which saith, . . . (同13.14)
- g. . . and before him shall be gathered all nations: (同25.32)

集まった資料の中で最も興味深いのは、次例のような動詞が第三要素になっている例である。

- (7) a. And when they drew nigh unto Jerusalem, and were come to Bethphage, unto the mount of Olives, then sent Jesus two disciples, saying . . . (「マタイの福音書」21.1)
- b. But as the days of Noe *were*, so shall also the coming of the Son of man *be*. (同24.37)
  - c. For where two or three are gathered together in my name, there am I in the midst of them. (同18.20)

- d. ... : yea, though many false witnesses came, *yet*  
found they none. (同26.60)

これらはいずれも「副詞節 + 副詞 + 定形動詞 + 主語 + ・・・」の語順になつており、表面上は動詞第三位現象を示している。この現象の説明として第一に考えられるのは、副詞節が話題化により CP 指定部に置かれ、IP 内で動詞第二位現象が生じた、というものである。

- (8) [CP [Adv Clause] C [IP [Adv [I V<sub>i</sub>] [VP ... t<sub>i</sub> ...]]]]

前節で述べたように、動詞第二位現象消失後に現れる動詞第二位構文は CP-V2 である可能性が高いが、IP-V2 の可能性もゼロではないので、(8) は不適切な構造として完全には否定できない。Kroch & Taylor (1997)において、古英語が IP-V2 であると主張する根拠として挙げられているのは埋め込み文中で動詞第二位現象がみられるという事実である。この事実を説明するためには埋め込み文は IP-V2 でなければならず、従って主節も同じく IP-V2 になる、という理屈である。大まかに言って、埋め込み文中で動詞第二位現象が可能な場合は二つ考えられる。一つは架橋動詞 (bridge verb) の目的語になっている補文中である。この場合は一般に補文中に CP 反復 (CP-recursion) が生じているとされており、上位の CP の C 位置に補文化子が入り、下位の CP 内において動詞第二位現象が生じていると説明されている。従ってこれは CP-V2 の特殊な場合であるので IP-V2 を証明する根拠にはならない。

- (9) ... V [CP C [CP XP<sub>j</sub> [C V<sub>i</sub>] [IP YP [I t<sub>i</sub>] [VP ... t<sub>i</sub> ... t<sub>j</sub> ...]]]]

二番目は、埋め込み文中に用いられた動詞が広い意味で非対格的

(unaccusative)であると定義できる場合である(Kemenade 1997)。即ち、外項に対して主題役割を与えないタイプの動詞が用いられている場合である。具体的には、非人称構文、非人称受動文などがそれに該当する。一番目の場合と異なり、これは明らかに IP-V2 である。このことが意味するのは動詞第二位現象がみられたのは限られたタイプの埋め込み文だけであって、埋め込み文全般ではないということである。Kroch & Taylor (1997) が IP-V2 の根拠として挙げているのは実はこの場合である。そうなると古英語は IP-V2 であるという彼らの主張そのものも怪しくなってくるが、それについてはここでは触れないことにする。以上の二つの場合を踏まえて、(7) を見てみると、①例文はどれも架橋動詞の補文ではないので CP 反復は想定できない② send, find といった明らかに非対格的ではない動詞が用いられている、いうことが分かる。従って (7)において IP-V2 が生じているとは考えられず、(8) を想定する可能性はないと言える。

(7) の事実の説明として次に考えられるものは、文頭の副詞節が CP に付加(adjunction)されており、二番目の副詞が CP 指定部にあるという可能性である。

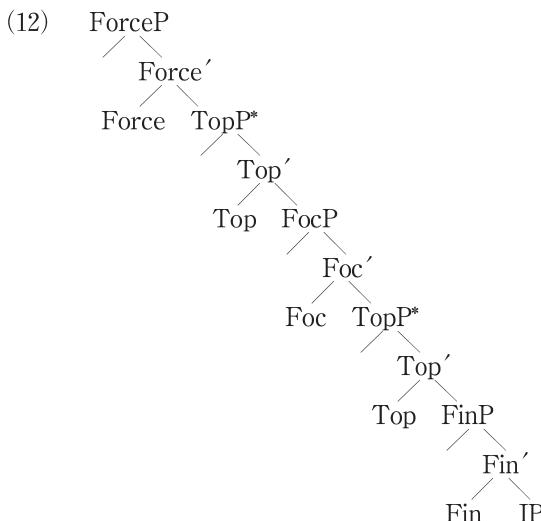
$$(10) \quad [_{\text{CP}} \boxed{\text{Adv} \text{ Clause}} \quad [_{\text{CP}} \text{ Adv} \quad [_{\text{C}} \text{ V}_i ] \quad [_{\text{IP}} \text{ YP} \quad [_{\text{I}} \text{ t}_i ] \\ [_{\text{VP}} \dots \text{ t}_i \dots ]]]]$$

従来より一般に CP や NP (DP)への付加は禁じられているので (10) の妥当性は低いと思われる。ただし、CP や NP (DP)への付加が禁じられるのはそれらが項(argument)として機能している場合である。主節を形成する CP が果たして項なのか否かは不明であるのでこれはあまり強い根拠とはいえないかもしれない。近年のミニマリストの考え方では統語的な移動はかなり制限が加えられている。例えば、Rizzi (1997:282) には次の

ような記述がみられる。

- (11) .... no free preposing and adjunction to IP is permissible, all kinds of movements to the left periphery must be motivated by the satisfaction of some criterion, hence by the presence of a head entering into the required Spec-head configuration with the preposed phrase.

即ち、(10) の副詞節が前置されるためはそれを支える適切なホストとして然るべき主要部を必要とし、その指定部の位置に代入されることにより前置が完了する、ということである。この考え方には従えば (10) の構造は許容されないことになる。文頭に移動される構成素を収容することができるようするために、Rizzi (1997) では CP の体系に大幅な修正が加えられ、次に示すように複雑な構造を想定している。



(Top = Topic, Foc = Focus, Fin = Finiteness)

(12)においてForceは節のタイプ（即ち、平叙文、疑問文、感嘆文、関係詞節、などの区別）に関する情報を表わしている。TopとFocはそれぞれ話題(topic)と焦点(focus)を支えるホスト役として機能し、Finは節全体が定形か否かの情報を表わしている。注目すべき点はFocPを挟んでTopPが二つ存在すること、及びTopPは反復可能ということである。仮に(7)の副詞節と副詞が共に話題であるとすると、(12)においてTopPが二つ現れることが可能であるので、副詞節と副詞はそれぞれのTopPの指定部に入ることができる。即ち、付加の操作を用いなくても文頭に二つの副詞要素を並べることができる。動詞がTop位置へ移動してくれれば<sup>1)</sup> (7)の構造が出来上がることになる。

(13) [ForceP Force [TopP [Adv Clause] Top [TopP [Adv  
 [Top V<sub>i</sub>] [FinP [Fin V<sub>i</sub>] [IP YP [I t<sub>i</sub>] [VP ...  
 t<sub>i</sub> ...]]]]]]]

第二番目の要素になっている副詞の正体は一体何であろうか。意味の面から考えれば代用表現のように思われる。このことに関しては次のような例が参考になる。

(14) a. ... : but whosoever hath not, from him shall be taken away even that he hath.

(「マタイの福音書」13.12)

b. ...; and whatsoever is right, that shall ye receive.

(同20.7)

下線部 him, that がそれぞれその前にある whosoever hath not と whatsoever is right を受けている代名詞であることは明白である。いわゆる左方転位(left dislocation)の構造である。(14)の例文と(7)の例文とを比

べてみればその平行性は明らかであるので、(7) も(一種の)左方転位の構造であると言うことができる。従って、そこで用いられている then, so, there, yet は代用表現であることが裏付けられる。

しかしこれらが代用表現であるとすると、一つの問題が生じる。代用表現が接語(clitic)である可能性、つまり、(7)の例文が実質上は動詞第二位現象である可能性があるということである。古英語においては人称代名詞と so などの一音節の副詞は接語として扱われ、CP と IP の境界線上の特別な位置に置かれるとされており(Pintzuk 1991)、動詞第二位現象に関してそれらは考慮に入る対象から外されている。従って、場合によっては次の (15) のように動詞が第三番目あるいは第四番目に来ている文が生じることになる。

- (15) a. *Ælc yfel he mæg don*  
each evil he can do
- b. *æfter his gebede he ahof þæt cild up . . .*  
after his prayer he lifted the child up
- c. & *seofon ærendracan he him hæfde to asend*  
and seven messengers he him had to sent

(Pintzuk 1991)

これらの例は代名詞を無視すれば動詞第二位構文になっている。(7) の then, so, there, yet が代用表現であるとすると、(15) と同様にそれらを無視すれば動詞第二位構文になるので、(13) のような構造を想定する必要がなくなり、(2) のような通常の CP-V2 構文として扱うことができることになる。Kroch & Taylor (1997)によれば、代名詞は中英語期に接語としての性質を失い、現代英語と同じく通常の NP (DP) と同等になった、とされている。実際のデータを参照して代名詞が接語かどうかを判断

する場合、IP と CP の境界線上にあるとされる接語の位置と主語位置とは隣接しているので、主語として機能する代名詞はどちらの位置にあるのか判断が難しい。しかし、目的語位置はそうではないので代名詞が目的語位置にあればそれは接語ではないということの証拠になるのではないかと考えられるかもしれない。確かに通常の場合はそういえるかもしれないが、動詞第二位現象という脈絡で考えるとそう簡単には言い切れないと思われる。当たり前のことなのでこれまで触れていなかったが、通常の「主語 + 動詞 + …」という語順もれっきとした動詞第二位現象である。ということは、(2) の CP-V2 を当てはめた場合、主語が CP 指定部、動詞が C 位置に来ている可能性が出てくる。目的語代名詞が接語であるとすればそれは IP と CP の境界線上に置かれるのであるから、表面上は「主語 + 動詞 + 代名詞目的語」という語順で現れることになる。

- (16) [CP [Subj<sub>j</sub>] [C [V<sub>i</sub>] [Obj-cl] + [IP t<sub>j</sub> [I t<sub>i</sub>] [VP … t<sub>i</sub> …]]]]  
 (Obj-cl = Object clitic)

従って、代名詞目的語が接語であったとしても表面上は動詞の右隣に現れる可能性がないとは言い切れないである。代名詞が接語であるという仮定のもとで、例えば主語も目的語もともに代名詞である場合を考えてみると、(15c) のように両者は並んで IP と CP の境界線上に置かれるはずである。しかし、今回の調査で得られた次のような例をみると、現代英語と同じ語順で、両者は隣接していないことが分かる。

- (17) a. And he sent them to Bethlehem, … ; and when ye  
 have found him, … (「マタイの福音書」2.8)  
 b. Then he suffered him. (同3.15)  
 c. …, and I will make you fishers of men. (同4.19)

- d. ...; and he called them. (同4.21)

また、次の(18)のように倒置が関わっていても同様である。

- (18) Whosoever therefore shall confess me before men, him  
will I confess also before my Father which is in heaven.  
But whosoever shall deny me before men, him will I  
also deny before my Father which is in heaven.

(同10.32, 33)

従って、先のKroch & Taylor (1997)の主張とあわせて、『欽定訳聖書』の代名詞は接語ではないと判断できる。他の代用表現も同様であると考えられるので(7)の諸例は(13)の構造を持つと結論付けることができる。

上記(4)と(5)のような単独の副詞が文頭に置かれている場合、それらは構造上どの位置にあるのであろうか。これらの副詞の中で、then, so, yet, thereは(7)にみられるように先行する副詞節を受けることも可能である<sup>2)</sup>。周知の通り(4)、(5)の副詞は接続詞的働きをしており、文境界を越えて先行する文脈の表す内容を受けている。従って、副詞が受ける対象が直前の副詞節なのか、それとも先行する文脈なのかの違いがあるだけで、代用表現としての機能は同じであると言える。類推により、他のafterwards, likewise, hereafterについても同様のことが言える。従って、(4)、(5)の副詞は(7)と同じくTopP指定部にあると考えられる。また(6)の諸例にみられる副詞句や次の例のように動詞の目的語などの項が文頭に来ている場合は問題なく通常の話題化であるので、それらの文頭の要素はTopP指定部にあると考えられる。

- (19) a. A bruised reed shall he not break, and smoking flax  
shall he not quench, ... (「マタイの福音書」12.20)

- b. Another parable put he forth unto them; . . .  
 (同13.24, 31)
- c. All these things have I kept from my youth up: . . .  
 (同19.20)

### 3. 倒置と話題化・焦点化

前節では動詞第二位現象の中でも倒置を伴った話題化とみなすことができるものを扱ったが、実際には現代英語と同じく倒置を伴わない話題化の例もみられる。

- (20) a. And all things, . . . ye shall receive.  
 (「マタイの福音書」21.22)
- b. . . . : him they compelled to bear his cross.  
 (同27.32)

次の例のように同一文中に倒置を伴ったものと伴わないものとが混在するものもある。

- (21) . . .; and some of them ye shall kill and crucify; and  
 some them shall ye scourge in your synagogues, and  
 persecute *them* from city to city: (同23.34)

因みに、ほぼ同時代に作られた他の英訳聖書を見てみると、『ティンダル(Tyndale)聖書』、『リームズ・ドゥエー聖書(the Rheims-Douay Bible)』では当該箇所は倒置なしで、『大聖書(the Great Bible)』、『ジュネーヴ聖書(the Geneva Bible)』、『主教聖書(the Bishops' Bible)』では『欽定訳聖書』と同じパターンが用いられている。次の例では倒置が期待されるのに倒置になっていない例である。

- (22) a. ...: and then he shall reward every man according to his works. (同16.28)
- b. ..., and *then* at my coming I should have received mine own with usury. (同25.27)

(22a) については『欽定訳聖書』以外はすべて倒置構文が用いられている。

(22b) については『ティンダル聖書』、『大聖書』、『ジュネーヴ聖書』、『主教聖書』において倒置構文が用いられている<sup>3)</sup>。(21)において倒置構文と非倒置構文が混在している理由や(22)において倒置構文になつていないう理由は見当がつかないが、少なくとも倒置を伴わない話題化がすでに使われ始めていたことははつきりしている。移動操作に関して、近年のミニマリストの枠組みでは移動現象を解釈不可能素性によって説明しており、例えばRadford (2009)では主要部(head)が持つedge featureと呼ばれる解釈不可能素性を消去するためにその指定部位置へ要素が移動するとされている。この考え方によれば、話題要素がTopP指定部に移動するのはTopが持つedge featureを消去するためであると考えられる。主要部移動が起こるのは、ある主要部が持つ何らかの意味で「強い(strong)」素性によって別の主要部が牽引されるためである、とされている。話題化において倒置が生じている場合には、Top位置へ動詞が移動しているのでTopが「強い」素性を持っていると考えられる。また、別の考え方として、Rizzi (1997)においては、話題基準(Topic Criterion)を満たすために要素が移動するとされており、説明の仕方としては恐らく、IP内から話題要素がTopP指定部位置へ移動し、話題素性(Topic feature)が初めからTopにあればそれで基準は満たされ、話題素性がIP内の主要部(この場合は恐らくI)にあればその主要部がVと合体してTopへ移動することによって基準が満たされる、ということになろう。従って、話題化において倒置が起

からなくなったのは、前者の考え方によれば、Top が強い素性を持たなくなってしまったためであり、後者の考え方によれば話題素性が初めから Top にあるからであるということになる。

(23) a. [ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [IP YP I  
[strF]  
[VP ... V ...]]]]] ⇒

b. [ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [IP YP I  
[wkF]  
[VP ... V ...]]]]]  
([strF] : 強い素性、 [wkF] : 弱い素性)

(24) a. [ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [IP YP I  
[ + Top]  
[VP ... V ...]]]]] ⇒

b. [ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [IP YP I  
[ + Top]  
[VP ... V ...]]]]]  
([ + Top] : 話題素性)

いずれの考え方を採っても、倒置構文から非倒置構文への変化は素性に関する変化で表わすことができる。両者の構文が混在することから『欽定訳聖書』の時代はこの変化の過渡期であったということになろう。

動詞第二位現象と認められる別の構文として否定倒置(negative inversion)がある。今回の調査でも neither を用いたものだけではあるが、いくつか観察されている。

- (25) a. Neither do men light a candle, . . .  
(「マタイの福音書」5.12)

b. A good tree cannot bring forth evil fruit, neither can a corrupt tree bring forth good fruit. (同7.18)

c. . . : and no *man* knoweth the Son, but the Father; neither knoweth any man the Father, . . .  
(同11.27)

d. And he said unto them, Neither tell I you by what authority I do these *things*. (同21.27)

e. And no *man* was able to answer him a word, neither durst any man from that day forth ask him any more *questions*. (同22.46)

(25c、d) のように助動詞を用いない否定倒置も若干見られたが、ほとんどはそれ以外の例のように現代英語と同じく助動詞を用いた倒置である。また、ここでは一例しか挙げていないが、助動詞 do を用いた倒置も比較的多かった。そういう意味では助動詞 do の使用はかなり確立していたと言えるであろう。Rizzi (1997:317)によれば、否定倒置において文頭に前置される否定要素は FocP 指定部に移動されると仮定されている。従って (25) の諸例の neither は FocP 指定部に移動されていると考えられる。ただし、(25b, c, e) にみられるように neither (及び nor) を用いた倒置は直前の文脈に否定構文があって、それと相関的に用いられるのが普通であり、その相関性は (7) の副詞との共通性を強く示唆するので、事態はそれ程単純ではないようである。即ち、neither (及び nor) は TopP 指定部と FocP 指定部の両方に置かれる資格があるということである。この問題を解決する方法としては甚だ単純ではあるが、neither (及び nor)

を最初に TopP 指定部に移動し、次に否定語であるということにより FocP 指定部に移動する方法が考えられる。あるいは、TopP と FocP の配置の具合によってはその逆も考えられる。他の否定語については単純に FocP 指定部に移動されると考えてよい。定形動詞は Foc 位置へ移動するが、この移動の仕方は話題化の場合と同じように考えることができる。即ち、Foc が「強い」素性を持ち定形動詞を牽引すると考えるか、あるいは[+Neg]を持つ I が V と合体し、焦点基準(Focus Criterion)を満たすためにその合体形が Foc 位置へ移動すると考えるかである<sup>4)</sup>。いずれにせよ、この性質は昔も今も変化していないので話題化とは違って倒置構文が保持されていると見做すことができる。

#### 4. まとめ

以上をまとめると次のようになる。

1. 動詞第二位現象は14世紀半ばに消失したとされているが、今回の調査では初期近代英語期においてはまだその名残がかなり残っている。
2. 古英語、中英語から受け継がれたと考えられる then を文頭に置いた動詞第二位構文が比較的多く見られた。他に therefore, so, likewise, there (場所), afterward, yet, hereafter が文頭に置かれている例も見られたが数は少ない。単独の副詞ではなく副詞句が文頭に置かれているものは数多くあった。
3. 「副詞節 + 副詞 + 定形動詞 + 主語 + …」の形式を持つ構文が見られた。第二要素の位置にある副詞は代用表現で、直前の副詞節を受けている。ここで用いられている副詞は then, so, yet, there で、直前の副詞節がない場合には先行文脈の内容を受けることができ

る。それが2. の場合に相当し、他の副詞も同様に扱うことができる。Rizzi (1997) の考え方を取り入れ、この副詞節と副詞は話題化された要素で、それぞれ積み重ねられた二つの TopP の指定部に入っていると考えられる。

4. 他の副詞句や目的語などの項が文頭にある場合は典型的な話題化で、それらは問題なく TopP 指定部の位置にあると言える。
5. 現代英語に見られるような動詞第二位現象を示さない、即ち、倒置構文になっていない話題化文も見られた。この倒置から非倒置への変化は素性に関係する変化として捉えることができる。他方、否定倒置は動詞第二位現象の典型の一つであるが、そのような素性に関する変化が生じず、変わらず動詞第二位現象を保持している。

今回は場所句倒置構文(locative inversion) は扱わなかった。別の機会に扱いたいと思う。

### 注

- 1) 上位の Top に移動しない理由については以下のところ答えが出せないので今後の課題としたい。
- 2) 他に therefore も先行する because 節を受けることができるが、今回の調査によって得られた資料には見られなかった。
- 3) 『リームズ・ドゥエー聖書』では別構文が用いられている。
- 4) 次のような否定語を用いない倒置構文も否定倒置と同様に FocP を用いて説明されることになる。
  - (i) a. So intimate is the relation between a language and the people who speak it that the two can scarcely be thought of apart.
  - b. Such was the force of the explosion that all the windows were broken to pieces.

(江川1991:485)

### 参考文献

- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework", in Martin, Michaels & Uriagereka (eds.) (2000).
- Clahsen, Harald & Kluas-Dirk Smolka (1985) "Psycholinguistic Evidence and the Description of V2 Phenomena in German", in Haider & Prinzhorn (1985).
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 東京：金子書房.
- Haegeman, Liliane (ed.) (1997) *Elements of Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Haider, Hubert & Martin Prinzhorn (eds.) (1985) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris Publications.
- Kemenade, Ans van (1997) "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English", in Kemenade & Vincent (eds.) (1997).
- Kemenade, Ans van & Nigel Vincent (eds.) (1997) *Parameters of Morphosyntactic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kroch, Anthony & Ann Taylor (1997) "Verb Movement in Old and Middle English: Dialect Variation and Language Contact", in Kemenade & Vincent (eds.) (1997).
- Martin, Roger, David Michaels & Juan Uriagereka (eds.) (2000) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Cambridge: MIT Press.
- Radford, Andrew (2009) *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery", in Haegeman (1997) .

### 参考資料

- Weigle, Luther A. (ed.) (1946) *The New Testament Octapla*. New York: Thomas Nelson & Sons.

(文学研究科教授)

## SUMMARY

### On Verb Second Phenomena in the Authorized Version of the Bible

Masaharu KATOH

In this paper, we examine verb second phenomena observed in the Authorized Version of the Bible. Roughly speaking, verb second phenomena can be regarded as preposing accompanied by inversion. What is the most impressive in the data collected is superficial verb-third order:

**[Adverbial Clause] + [Adverb] + [Finite Verb] + [Subject] + ....**

- (1) And when they drew nigh unto Jerusalem, and were come to Bethphage, unto the mount of Olives, then sent Jesus two disciples, saying ...

The adverbial clause is introduced by *when*, *as*, *where*, or *though* and the adverb, such as *then*, *so*, *there*, *yet*, is correlated with it. We argue that the adverb is a pro-form and refers to the preceding adverbial clause. Following Rizzi (1997), we propose that both of these two adverbial elements are topicalized and situated in the Topic Phrase (TopP). More specifically, TopP can undergo free recursion and the adverbial clause occupies the specifier position of the upper TopP while the adverb occupies that of the lower TopP. The adverbs mentioned above, being pro-forms, can also refer to the content of the preceding context. In such cases, they appear in the sentence-initial position and the typical verb second order is obtained. The same is true of other adverbs, such as *therefore*, *likewise afterward*, *hereafter*. Cases in which preposed elements are VP complements and other adjuncts are, needless to say, instances of topicalization.

In the data collected, there are cases where topicalization is not accompanied by inversion. Given that inversion is V-movement to C, it is assumed that some change in the feature specification of a head prevents the movement.

Negative inversion is another instance of verb second phenomena. Traditionally, preposed negative elements have been assumed to be focal-

ized. In the data, a few instances are found but all of them are introduced by *neither*. It is well-known that negative inversion sentences accompanied by *neither* are correlative to the preceding negative sentences. In this sense *neither* behaves the same way as the adverbs mentioned above (*then, so, there, yet*). In other words, it is a topic as well as a focus. Suppose that Focus Phrase (FocP) is contained in the CP system and that a focalized element occupies its specifier position, following Rizzi (1997), then it may be that *neither* is moved to the specifier position of FocP via that of TopP. As far as negative inversion is concerned, there has been no change in feature specification and inverted structure is preserved in present-day English.

**Keywords:** verb second phenomena, split CP hypothesis, inversion, negative inversion, Early Modern English